

「荻窪の記憶」

こぼればなし

過去への扉を開いたユーモア小説

5年間にわたって開催してきたパネル展「荻窪の記憶」も一区切りしたので、今回は、私が郊外住宅地・荻窪の歴史に関心をもつきっかけになった小説について紹介したいと思います。いまから9年前、私は、母方の祖父で、「ユーモア小説のパイオニア」といわれた作家・佐々木邦の評伝を講談社から出したのですが、その執筆のために膨大な数の小説を読んでいて、荻窪の宅地化をめぐる話に出会ったのです。それは、邦がまだ慶應大学の予科で英語を教えながら小説を書きはじめた大正14年、「婦人画報」に連載した『好人物』という小説でした。

小説の主人公は丸の内の会社に勤めるサラリーマンの千吉君。ある日曜日、大場君という同僚が家にやってきます。大場君の趣味は、郊外の土地を買って値上がりを待つ「土地道楽」で、目下、荻窪に家を新築中です。これは、その大場君と千吉君の妻・安子さんとのやりとり。

〈「ご新築だそうでお芽出度うございます」、「いや、眞の掘って建て小屋で(…)何れ落成の上は一日御来遊を願います」、「有難うございます。中野とか承りましたが……」、「荻窪です。中野辺ではもう郊外気分は味わえませんか」と大場君が答えた。これは中野辺にはもう安い地面がないという意味である。「東京から何時間かゝる?」と千吉君が訊いた。「何時間なんてかゝって溜まるものか。丸の内まで五十分さ」と大場君は力んだ。郊外生活者は東京に遠いと言われるのを最も厭う。〉

「中野辺にはもう安い地面がない」というように、都心に近いところから宅地化が急ピッチで進んでいたことがわかります。通勤時間はサラリーマンにとって一番の関心でしたが、この時期、交通機関が急速に発達したこともわかります。

さて、その翌週、はじめて荻窪を訪ねた千吉君は、「好いねえ。町中から来ると気分が清々する。あの新緑の間に赤松が並んでいるところはなんとも言えない。油絵だね、まるで」とすっかり感服します。いまも荻外荘周辺には赤松が多く見られますが、当時から荻窪の景観の特徴だったようです。千吉君の目に新築の住宅が入ってきます。「文化住宅の多いにも驚く。日本家屋は滅多にない」と、「それは皆新築だもの。新たにやるなら何人にしても便利なものを建てるからね」と大場君が答えます。

以下は、昭和4年刊行の今和次郎著『新版 大東京案内』からの引用です。「この頃の郊外の住宅は、多少とも所謂文化住宅の感化を受けないものはないといってよい。日く、赤瓦、日く、ガラス窓、日く、西洋下見、モルタル塗りの外壁等々である。そして窓にはカーテンがかけられ、籐の椅子が置かれたサンルームがあり、^{ベランダ}蔓棚が設けられる」。赤い屋根、白いレースの掛かる窓、戦後の日本人がイメージしたマイホームの原型は、すでに戦前のこの時期に生まれていたのです。

さて、マイホームを建てるには土地を手に入れなければなりません。その土地は、今と異なり、買うより借るのが一般的だったようです。大場君に誘われて荻窪に家を建てた同僚の木下君は「買うものか。自分で建てる分には買っちゃ引き合わない。こゝは坪四銭だぜ」といい、五百坪の土地を二十円で借り、「地代が上がったら半分又貸しをするんだ」といいます。なかなか、抜け目がありません。では、昨日まで、麦畑や大根畑だったところに家を建てて不便はなかったのでしょうか。小説は、少々皮肉な調子でこう書いています。

〈「電燈はあるんだろうね?」と仙吉君は益々^{うき}遠振りを発揮する。「笑わせるぜ。それだから来て見給えと言うんだ。水道と瓦斯^{ガス}がないばかりさ。しかしタンクをこさえれば水道も同じことだ。石油^コ厨^ロ炉は瓦斯の代用になる」と郊外生活をするくらの人はすべて代用精神がさかんだ〉

紙幅の関係で詳しく解説できませんが、当時の荻窪では、土地探しはもっぱら口コミがものをいったらしいこと、若いサラリーマンたちが不便を忍びながらも郊外生活に夢を託していたことなど、当時の様子が彷彿としてきます。

荻窪地域区民センター協議会OB 松井和男



畑の向こうには、新築の洋風の家が…
(佐々木邦「文化住宅」の挿絵 和田邦坊画)